

大学入学共通テストの概要と 受験指導



佐藤誠司

この記事では、主に次の2点を説明します。

- ・共通テストの基本的な性格と今後の展望
- ・センター試験との違いを考慮した、共通テストの対策学習

最初に頭に入れておきたいのは、2021年度から実施される共通テストは、少なくとも英語に関しては最終形ではないということです。具体的にどう変わるかを予想するのは困難ですが、センター試験のように10年も20年もほぼ同じ形式・内容の試験が続くとは思えません。日本学術会議から8月18日に公表された「大学入試における英語試験のあり方についての提言」でも、多くの課題が指摘されています。今後とも試験の変化に応じた適切な対応が求められるでしょう。

I 共通テストの基本的な性格

公表されている「問題作成方針」には、次のようなことが書かれています。

- ① 4技能のうち「読む」「聞く」を評価する。発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しない。
- ② CEFRのA1～B1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- ③ 「概要や要点を把握する力」「必要とする情報を読み取る【聞き取る】力」などを測る。
- ④ リスニングには1回読みの問いも出題する。
- ⑤ 筆記とリスニングの配点を均等にする。

※ただし配点比率の決定は各大学の判断に委ねら

れており、実際には多くの大学が筆記試験の配点を高くしています。

- ⑥ アメリカ英語に加えてイギリス英語の使用もありうる。リスニングの音声は、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。

また試行テストの問題を見る限り、全体的にセンター試験より共通テストの方がやや難しいと言えそうです。特に、問題量の増加への対策が必要でしょう。参考までに、直近のセンター試験と試行テストの(100点満点に換算した)平均点を比較しておきます。

試験名	筆記	リスニング
①センター試験	58.15	57.56
②試行テスト	51.15	58.82

※①は2020年度本試験。②は第2回(2018年11月実施)の高3生の平均点。

II 入試制度の変遷

大学入試(英語)の大きな変更の歴史をまとめると、次のようになります。

1979年	共通一次試験がスタート
1990年	センター試験がスタート
2006年	センター試験にリスニングが加わる
2021年	共通テストがスタート
2025年	新制度がスタート予定(内容は未定)

共通一次試験は、国公立大だけが利用する試験でした。センター試験は私立大にも門戸を広げたため、これを合否判定に使う私立大が増加しまし

た。さらに「リスニングの力も測りたいが、自前で問題を作るのは難しい」という大学側からの要望に応える形で、2006年からリスニング試験が加わりました。こうした経緯から考えて、今回結果的に挫折した「入試改革」のもとでの発想は次のようなものだったのでしょう。

信頼できる英語の試験がほしい→英語教育の目標を考慮すれば「4技能試験」が望ましい→しかしライティング・スピーキングの採点は技術的な課題が多く、大学入試センターには作れない→そのノウハウを持っている民間業者の試験で代用しよう（既にかんりの大学が民間試験を合否判定に使っている）

Ⅲ センター試験と共通テストの違い

端的に言えば、センター試験は不完全な4技能試験であり、共通テストは2技能試験です。

英語学習の目標が4技能の習得であることは、ずっと以前から学習指導要領に書かれています。センター試験はその理念に沿って、できるだけ4技能の測定に使えるテストを目指しました。2006年のリスニング試験の導入によって、「読む」「聞く」についてはスタンダードな試験が確立します。一方、「書く」は整序作文（第2問）、「話す」は発音問題（第1問）で判定するのが建前でしたが、それではやはり不十分です。そこで、Ⅱで説明した次のような制度設計が構想されました。

受信力（読む・聞く）は共通テストで測る。
発信力（書く・話す）は民間試験で測る。

結果的に民間試験の利用が見送られたため、共通テストは2技能にしか対応していません。したがって4技能の判定という目的に照らせば、センター試験より「後退」したとも言えます。

Ⅳ 共通テストの今後

国公立大二次試験では英作文が出題されるの

で、実質的には国公立大入試は「3技能試験」です。また公立高校入試も昔に比べれば大幅に質が向上しており、「読む・聞く・書く」の3技能試験としてはかなり優れたものでしょう。したがって「理想は4技能試験である」という前提に立つなら、少なくとも国公立の学校に関しては、高校入試も大学入試も「あとはスピーキングの試験を加えればよい」という段階まで来ています。なお、「実質的に3技能試験ならそれで十分ではないか（共通テストは2技能試験でよい）」というわけにはいきません。共通テストは私立大の利用も想定しており、受験者の多い私立大は自前でライティングの試験を作ることが難しいからです。

将来的にはAIを活用した採点技術が進歩し、ライティングの記述答案やスピーキングの音声を機械で正確に採点できる日が来るでしょう。そのようにして共通テストが完全な4技能試験になるのが1つの理想形です。それが実現するまでは、「共通テストは不完全な試験だ」あるいは「（4技能を測る）センター試験に戻す方がいい」といった声は消えないかもしれません。

もともと、近年では英検・GTEC・TEAPなど民間試験の成績を入試判定に利用する大学が着実に増えています。たとえ共通テストが今のままであったとしても、大学入試の4技能試験化は今後も進んでいくと予想されます。

Ⅴ 共通テスト対策学習のプランニング

共通テストの筆記・リスニング試験の具体的な出題内容の説明は別の記事に譲り、ここでは共通テストの対策学習を大きな視点から考えます。

センター試験と共通テストの違いを考慮して言えば、次の2点がポイントになりそうです。

- ① リスニング学習の時間を増やす。
- ② 本番の模擬練習をできるだけ多く行う。

センター試験では筆記とリスニングの配点比率が4:1でしたが、共通テストでは4:1、3:1、1:1な

ど大学によってまちまちです。1:1の大学も3割程度あるので、自分の志望校の配点を確認して、リスニングの比率が高ければその対策を重点的に行うとともに、1回読みの出題形式にも慣れておく必要があります。

また筆記試験でも、共通テスト特有の受験技術が必要です。試験時間(80分)はセンター試験と同じでも、設問文も含めて読むべき英文の量が多いため、センター試験以上の速読力が求められます。また、ウェブ記事・広告・レシピ・ブログなど情報提供型の素材が多く出題されるので、読む力だけでなく情報を頭の中で素早く処理する力が重要になるでしょう。さらに、factとopinionを区別する新傾向問題などへの慣れも必要です。市販されている模擬試験問題集などを使って、時間配分を考えながら本番と同じ形式の問題を解くことが、最も効果的な対策学習になるはずですよ。

VI センター試験過去問の利用方法

センター試験の過去問の多くは、共通テスト対策として使えます。試行テストの筆記・リスニングで出題された問題と似た形式・内容の問題が、過去のセンター試験にも見られます。それらを重点的に学習するとよいでしょう。

ただし、センター試験第2問(空所補充・整序作文)の過去問は、共通テスト対策には向かないと思います。たとえば次の問いは、2020年度センター本試験(第2問)からの引用です。

To say you will go jogging every day is one thing, but to do it is (). (答: another)

共通テストにはこのような形式の文法問題は出題されません。この形(A is one thing, but B is another. = AとBとは別だ)がリーディングやリスニングの素材中に出てくる可能性も低いでしょう。文法問題を解く時間があれば、その時間を別の学習に回す方が効率的です。

VII 文法をどう教えるか

筆者は「文法学習」と「文法問題対策学習」とは別物だと考えており、後者を(4技能以外の)第5の技能と呼んでいます。ここでは仮定法を例として、共通テスト対策を視野に入れた文法指導の方向性を考えます。

仮定法過去は、しばしば「現在の事実の反対を仮定して自分の願望などを表す形」と説明されます。基本形としてIf I had enough money, I could buy the car.のような文が使われ、入試にもたいいこのような形が出題されます。しかし4技能学習との関連で考えたとき、それでいいのだろうか?という疑問を筆者は以前から持っています。仮定法過去の実例の用例を見ると、多くの参考書が軽視している第2の使い方の方が圧倒的に多いように思えるからです。次の文は、第2回試行テスト(筆記)の設問からの引用です。

This recipe would be good if you want to enjoy a hot dish on a cold day.

注意点は次の2つです。

- ① if節中の動詞がwantedではない。
- ② 「現在の事実の反対」を表してはいない。

この文の説明は、基本的には「意味がわかればよい」で十分でしょう。ただし、wouldが使われている理由を理解することは大切です。文章中にこのようなwouldはしばしば出てくるし、作文や会話での利用価値も高いからです。

参考までに、拙著『英文法、何を重点的に教えるか』(大修館書店, 2017)で行ったセンター試験の過去問分析の結果の一部を示します。

〈if+直説法〉の文における主節の動詞の形

現在形	36	may / might	9	命令文	6
will	26	could	7	would	1
can	11	should	6	その他	6

この分析からわかるとおり、if節中の動詞が直

説法（現在形）であっても、主節で might, could, would を使う場合はしばしばあります。それらの助動詞の過去形は仮定法過去に由来し、話し手〔書き手〕の控えめな気持ちを表します。

4技能学習、あるいは実際に使われている英語をベースに考えると、仮定法の分野で最も重要なのは、こうした控えめな気持ちを表す助動詞の過去形の使い方を習得することではないでしょうか。

現実には、文法の授業で仮定法を教える場合、教師の説明は「第5の技能」に傾きがちです。たとえば、前述の拙著での分析では仮定法過去完了の使用例がセンター試験にはほとんどありませんでした。読解（および会話）問題中に出てきた仮定法過去完了はわずか2件です。対照的に、センター試験第2問（空所補充・整序作文）中には仮定法過去完了の出題例が8件ありました。この例からわかるように、文法問題を解くための知識はそれ特有のものであり、読む力に直結するわけではありません。その認識に基づき、筆者から受験生に1つのアドバイスをします。

「国公立大志望者は、文法問題集を使うべきではない。」

入試では読解問題の配点比率が圧倒的に高いので、読む練習が足りないと合格点が取れません。共通テストにも国公立大二次試験（一部を除く）にも、文法問題は出ません。したがって国公立大志望者は、「読む・聞く・書く」の3分野の学習に集中すべきです。

なお教室での指導に即して言えば、新課程では基本的に「論理・表現」の授業で文法を教えることになるはずですが、旧課程の「英語表現」の場合、自分の考えを自分の言葉で発信する力を養うのが本来の学習目標だったはずですが、実際には（教科書や副教材の内容から判断する限り）「まず文法知識を頭に入れる→それを使って（出題者が想定した）英文を作る」という pattern practice が中心になっていたように思われます。新しい

「論理・表現」の教科書は、そのような「文法至上主義」からどの程度脱却できるでしょうか。

Ⅷ 受験する試験の組み合わせへの配慮

最後に、進路指導の観点から考えます。今日の英語の試験は種類が多く、それらの全部に合わせた学習をしようとするのは非効率です。できるだけ似た傾向の試験を組み合わせ受検し、「このタイプの試験なら対応できる」という力を養うのが効率的な学習方法だと言えます。

最初の分かれ道は、民間試験を受検するかどうかです。受験する場合、プラス面としては「受験機会が増える」、「文法問題対策は不要」、「二次試験対策にも役立つ」などが、マイナス面としては「スピーキング学習が必要」、「受験に要する費用が増える」などが挙げられます。

たとえば広島大学の志望者は、英検準1級に合格すれば共通テストはみなし満点となります。英検でも二次試験でも文法問題は出ないので、その対策は不要です。また民間試験は4技能テストであり、スピーキング以外の3技能の対策学習は二次試験対策とオーバーラップします。

国私併願の場合はどうでしょうか。仮に生徒が「第一志望は国立大です。併願先の私大をどう選べばいいですか」と質問してきた場合、筆者なら「文法問題を出題しない私立大学・学部を選びなさい」とアドバイスします。近年では文法問題を出題する大学は減りつつあり、特に偏差値の高い大学ほどその傾向があります。たとえば慶応大で文法問題を出題する学部はほとんどありません。

* * *

センター試験から共通テストへの移行に伴う最大の変化は、文法問題対策が不要になったことだと筆者は考えています。このことは、共通テスト対策を含む英語の学習・受験指導の中で大きな意味を持ちます。この記事が少しでも現場の先生方のお役に立てば幸いです。

（さとう せいし・有佐藤教育研究所代表）